篠田久次郎輯録

鹿兒島戰爭記

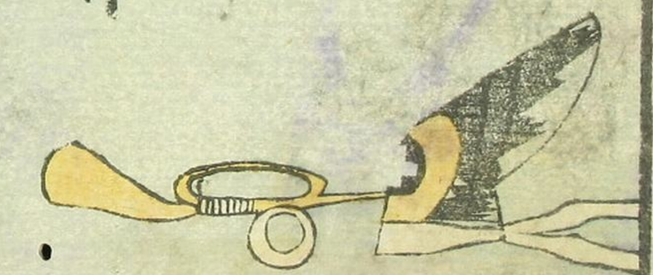
五編

A430
3

篠田仙果編

方圓含清狀画

當世芸者傳



價三戔五厘

鹿兒戰爭記五編

東京　篠田仙果録

48-7873

いく年由ありと玉意の花報まうければ治花表の[illegible]
安まい宮の三人いろいろ百人陽伏て居らんもそろうがくしと
法方を探索家中あるよう拾るふ何若の仕業あるや大坂の
市中ゆて人通りあつとも多きの玉江橋〇京町橋〇ろうぞ
〇者陽万字ゑ辻の口ヶ
新人先の法札を掲げう
今般貧民救助の方
会場を開ろう
陽る法税
花令答
の使を廢
すあつて

今日より
安堵して
営業を
出るべし

但し市中紙幣捨
出る者ハ厳重
対軍対之

▲五門と小銃七百挺と三月
弥十年三月
新政大法布出
張深ト決めたり
赤神戸十嵩鉄砲生花の
外国人フテーヨル氏の不指の大砲▲ 五日何者ある事世名を

かく〳〵極いそぎ兵を召て
ゆき〳〵と條約せ〳〵ものを
薩出立ち是より田中
水戸の宰が新落
あらんうといふ説あり
東京ゆも二三ケ所
紙札を出せ〳〵
ものあるべし

▲開港体顕て篠原国幹
殺下ふ屠せ〳〵西々小平
中佐武彦六百人の暴徒
と幸〳〵坪井町と横切て
京町口大通り一ぱい
来れば熊毒会もあり
出〳〵双方小銃の発砲先
そろへ近代くらい
出たる麻呂清勢ハ
多をいらちの河を
渡て首へ死ぞと鉄砲
うちすて刀を引ぬき

熊本城外の地雷火

花火なる銃丸下ふ
を熊毒会の出る
中へおめてもちぶ
切とあば名会小銃
の剣ゆてうく隊き
銃へとも暴徒ハ
方の死がいを物とし
銃撃ふ薙ふ
見べ名会のそうく
乳れ出ふ破
れんとあるのそ
陣中ゆそふ

谷陸軍少将の指揮もとゆゑ
蓋樹ゞ里八雲樹の針さえ
ゑとかるうとはんくしりしが
大自然所に不仕方なし
地震火水気の通ぶん
方山は不崩壊ろ
百雷一時に落るかと

▲只ふだろうの震動ゆえ地
ちまちまち破裂し
て暗夜ふひとしく
ふ樹あぶり砂石八方へ
飛乱さまれば
勇ましいさま
なる暴徒九
四五十人ばかりて
ちまるべんや
相撲
ちきれ
ゑ数

法華坂の地雷火

空中へ打上られ

とな
星

なく命ある者もとりがれ足と
の羅紗身体は火傷れとるく猛熱沈獄
さすが暴徒も地雷火は驚目るし
て殘るの人数悉くうづまれて被害をうけ
猛者共は四面よりきびしく殺戮
ひより病々小年中隊戦争
かへすべき暫ひまなく殘者ゆへ
○篠原国幹惣井町ゆへ
怒をあすめ居しは遥ろ彼方の
京町口へ退きぬ

大砲の方ハて大地を裏く
響とともに暴徒
あるいハ人ハ何のうと
あるいハ京町口
ハむるる
暴徒五
名をせまり
只今
谷陸軍少將
地雷火をも味方の
被害せしと推進せしく
篠原国幹と

☒あるひとこまもまた進まられど

☒

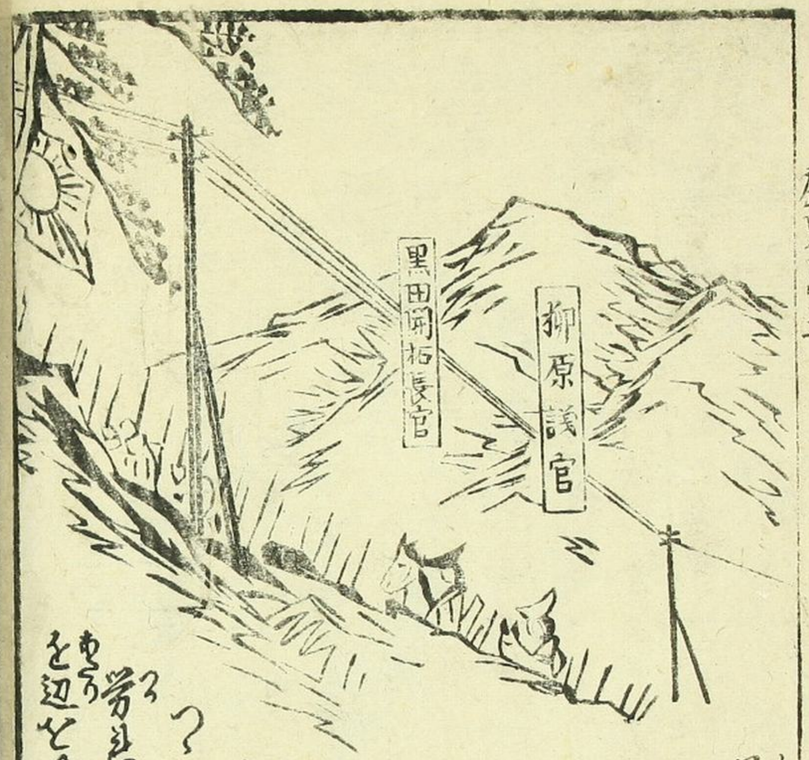
▲熊本

会が彩さ

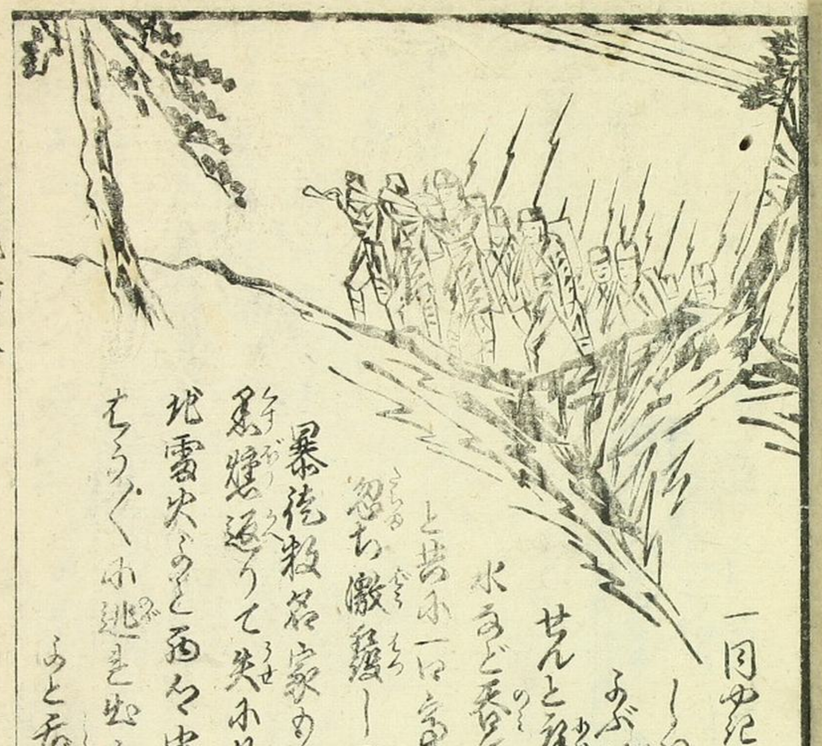
ふ陽ずに

の後人へ

☒



若そこなひ源入せば
いといろるる汁器ふ
是らんもたろう雖し
と大ひふ驚る時尼
ふ
活従ゆくこえよりど
つて彼西々ふ平
中清我表第い
幸く暴徒と引あず
つ新町をきろうしふ
労をとおもし休めんと
を辺と云ひとの而の人家い



一同出たちつれ品一形のう
しふ一口亭と屋号と
ふ料理茶屋西京休足
せんと座より入りて暴徒とも
水をと云てをうし廻一刻の雷
雨ふ激盛し内ふ入りて休息せし
地雷火ふ牧名家のうとも屋中へおとりれ
たりうりりやまくふ而まの
ちうくふ廻ふ出ふくもエうし地雷火
ふと云を震ひて驚ひけり

○依又西京行左衛門尉ヲ二月八日二名伏見宮ハ西園寺様ハ
小倉ヲ西園寺ハ出發ス右ハ藤原兼信の事件紀間と
て儀式行京ヲ出ル
とゝ〜玉田參議
門路大警祝
安田周防
檜大出花賀
警衛せゝ出
軍艦四隻
慈氣船
五隻ヲ藤一文藤
三百警祝ハ巡査五百

清水ふれ
緑葉ヲ外
軍用
二のふなぶし
暴徒
と図

落合ハ警祝ハ巡査二百余名ヲ警祝ハ
巡査二百余名通行警祝ハ巡査三十
余名発せゝ出ル兵隊ハ兵せ
先ヲ暴徒ハ拒ス

ハ警祝中京
高橋ヲ下る
外くゝ
と。

暴徒等居穴ハ入る

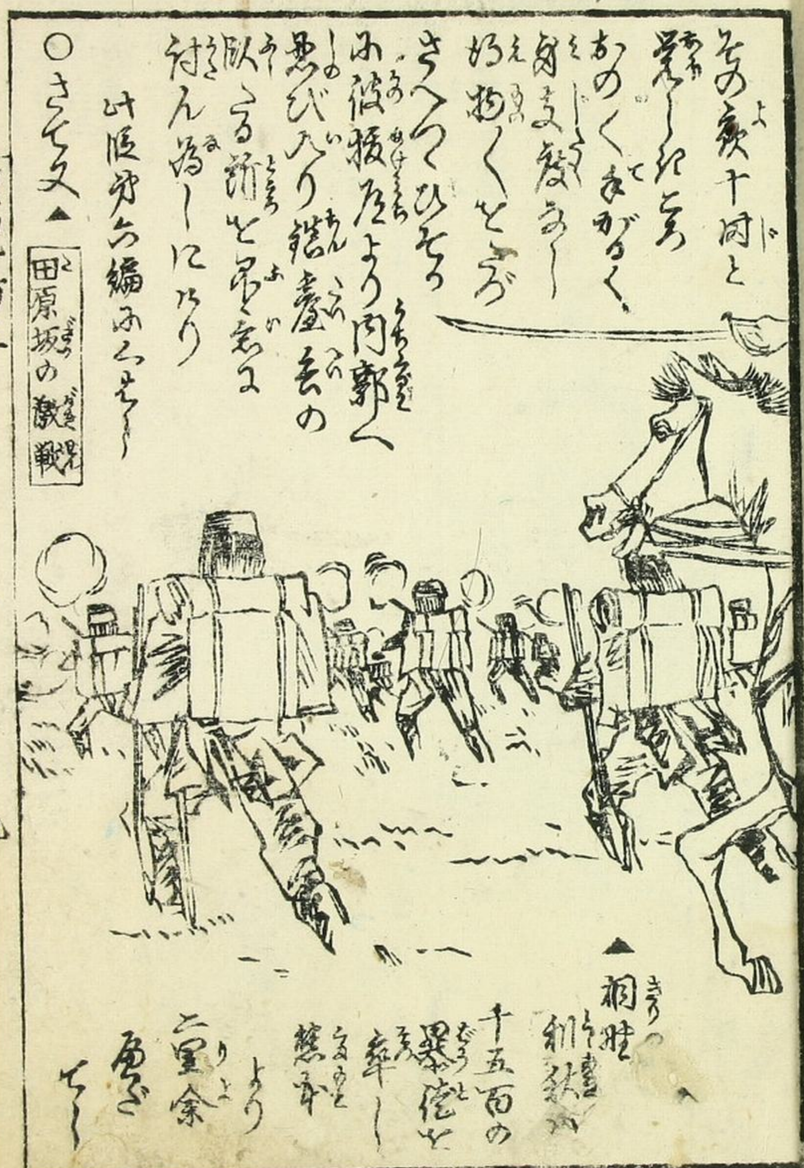
四徳の
通路と
新道ヲ

しかるに楠が引部ふいをうつより是を聞の
原宗有り墨俣を堀ぶ諸と云国
叶間敷い知らざりしが
墨俣堀ふ終せ
諸ヤのものが彼の
堀ヤ原の柴門と
ひと変
福岡鎮臺長
しく殺示
されば
墨俣
どもたちふ
ものとび

その家十間と
墨俣を
あのくまがるく
家を殺ふ
切物くとぶ
さへつてひそ
ふ彼板原より門郭へ
思ひ入り結臺云の
臥ふ新と呂云
付んなしにたり

叶原宗六編ふ六

○さて又▲ 田原坂の激戦



▲相賊 作者 細鈴

十五百の墨俣を
奪ひ
自分の
より
二重余
角ざ

本の墨町」と押出せば福島の
諸古参い極本宿へ出張し暴徒
来ると雷しくべ七本村を焼りの
白田原坂の要害の地の陣と
敵と戦ふ有るあらせば
相撲の人数田原坂の禁より
関ヶ上りの砲撃したり
下探と進ぞ〜〜と

鹿兒戰爭記五編終

明治十年三月三日出版

一冊人　竹藤田人次郎

同大阪壱小二

出版人　杉浦朝次郎

篠田久次郎編

鹿兒島戰爭記六編

大友朔次郎

鹿児島戦爭記

篠田仙果録　六編

小井清祝

東京　蔦屋清吉

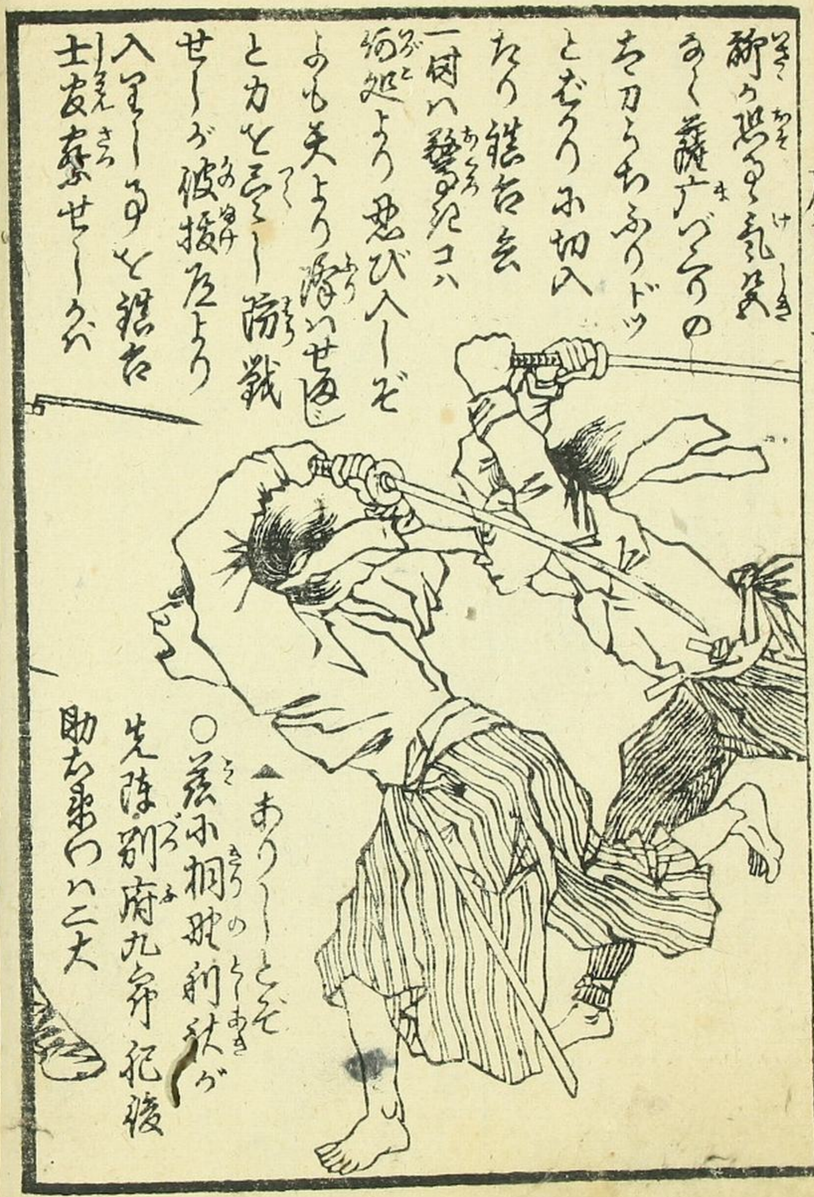
價三錢五厘

鹿児島戰爭記六編

東京　篠田仙果録

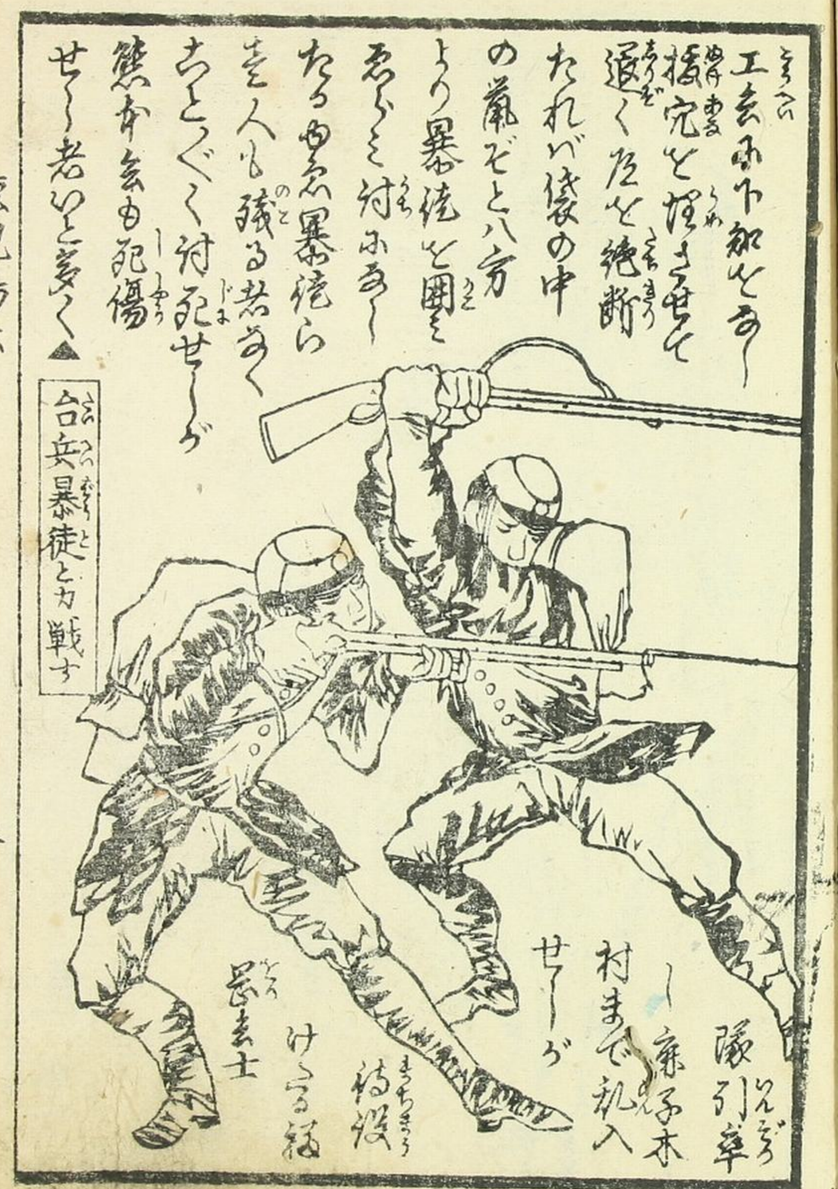
再ざ況熊本城の外郭曲のみ一木のぬけ穴をうめびらぐる暴徒らい結衣去の不去とうんと陣営とうかぐしして矢弾見紙絶るなられば楽ふわ逃へすーたれどえとう暴ある壮者ども

暴徒台兵の陣を伺ふ



御方ハ暴徒ニ乱入
ス〻ク薙刀ヲ
ふりかぶりドッ
とむろうふ切入
たり能古ニ
一討ハ警官ニコハ
何処より思ひ入ーぞ
よも矢より落いせ
とカとこそ防戦
せーぶ彼接戦より
入ーまーまと能古
士安泰せーぶ

▲ありーしとぞ
○茲ハ相馬利秋ガ
先陣別府九郎紀後
助ち番ついニ大



工ニハ下知をー
接戦ヲ始めて
退くなを絶断
たれば袋の中
の鼠ぞと八方
より暴徒を囲ム
ス〻ム討ふー
たる暴徒ら
を人も残る若ク
ちとぐく討死せーぶ
能古ニハ死傷
せーー者ひとぶく▲

合兵暴徒とカ戦す

隊引率
ーー家ノ木
村まで乱入
せーぶ
けふる紅
長ニ士
相撲

向坂の中途一ツ出し一名の樹木を小搦まとり数百挺の
小銃と一声に放撃せり累積の隙長肥後助右衛門
年幸六十有余す
髭黒なる白髪を
乱し白縅たんで

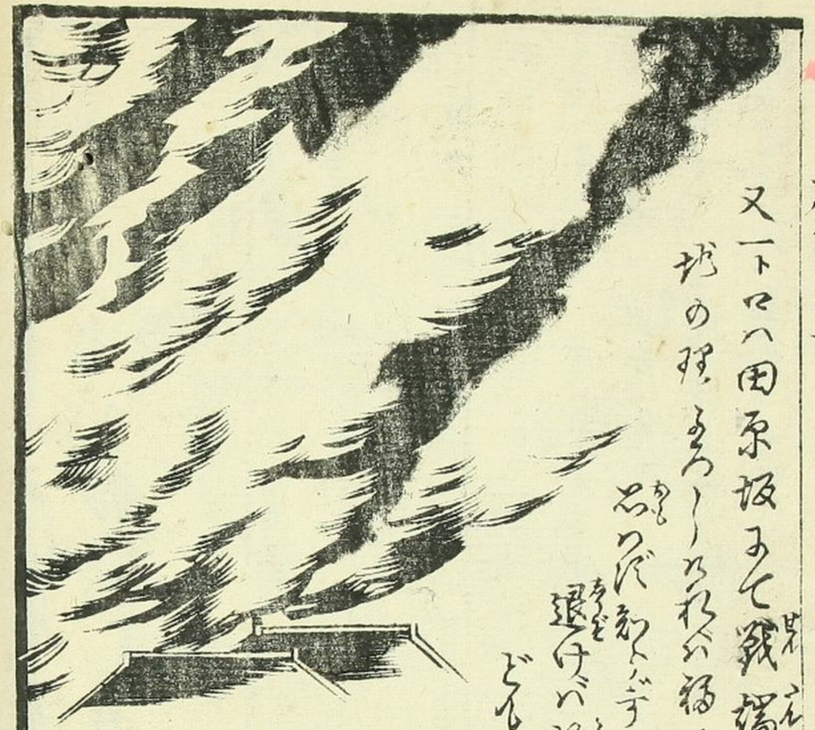
肥後助右工門

▲拵
巻図

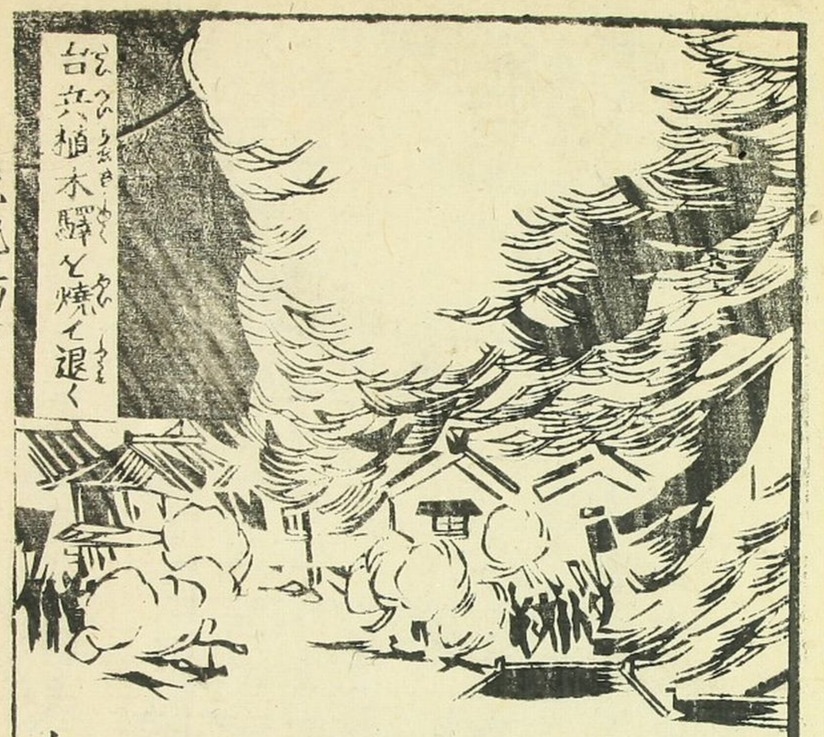
大音
呼ぶ
るハイカホ
味方の美
ちも幸う
る禁ホ運れ
糸縫
かひ
後代
笑ひ
進ん
勉

◎器
俄の
ひ敵行の如く付
し味方と荒戦
刎
斎の
間と
ふ
ホ一歩も
遅
激戦
教刎
及び

向坂激戦



又一トロハ田原坂まで戰場を聞きしに墨俣の地の様子もしられぬ程墨俣と云ふ所にて忽ちに敵の大勢に出合ひ遂に下淵辺のうちに退けば敵方やはり墨俣どもに平一さんが押かけ高勢ひ強く進み来りしが敵方の抜刀隊に合ひ抜刀隊を繰り引あげ切り込ひ敵を切り伏せ〳〵敵を切れと云田原坂の無四



傷勢とが新に加勢ふ来りて敵を絶切り前後より挟まれ大勢と打て出て墨俣いあとを繰〳〵く墨俣に抜刀隊を押きられ撃ち植木驛の官軍より抜刀隊の氏家を燒南の関と退きて墨俣に退き云とうちまい

津を元一とよい南の関のさ方川森村府ヶ
村へ引退き陣を築き陣を立て
敵又態ヶ様中なる谷陸軍ヶ松い参様
様山中に児玉ヶ様と組織色様外ヶ
出張き屯て云を云ふ残引上て荒様に
及んでうしが夜ヶ五り様中より頻りに
砲撃なーるヶ異徒い様の霧色浸丸
又い地実火に焼色るの様白てくるを
来てくれ丁六橋安色橋ヶ松ヶ
かを樊陸を徒を勢へを
ふーるが明色へ共三日
藤原玉輔岳とてみ

暴徒花岡山より大砲を放

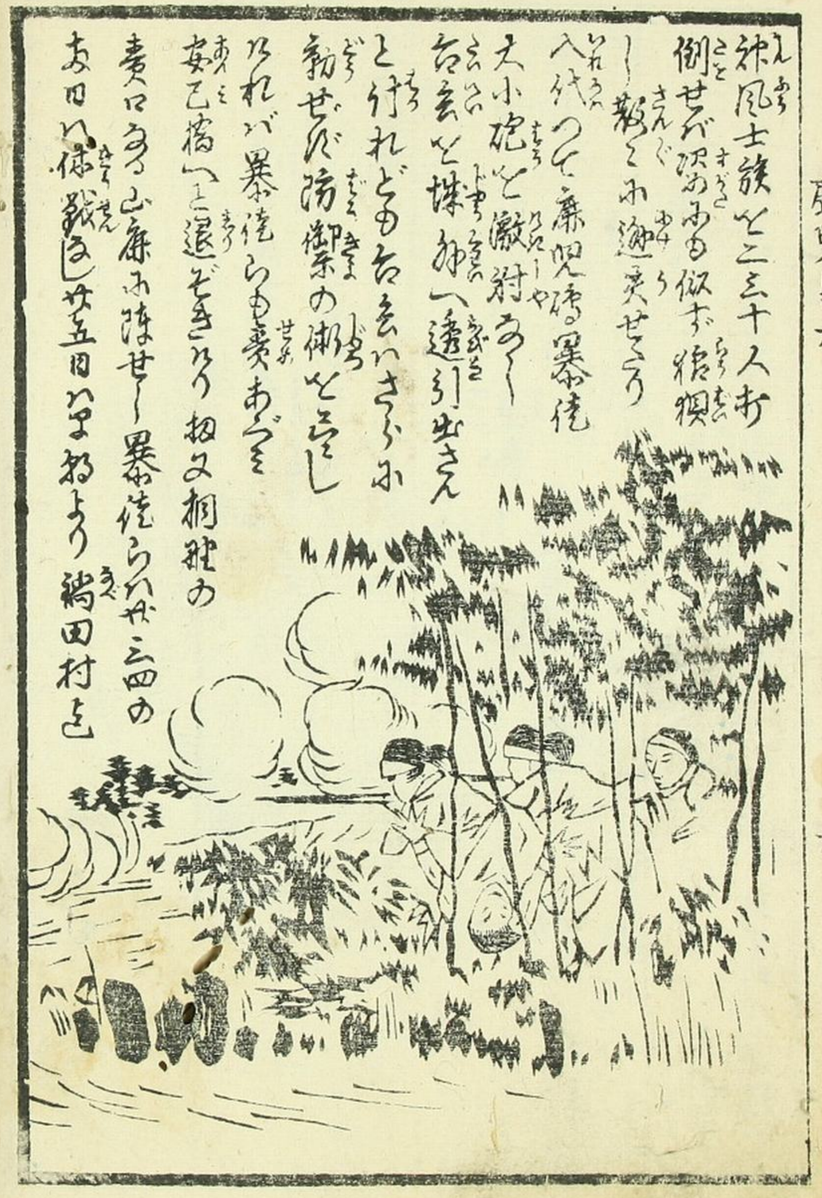
中清武者。渕辺軍平
樺山右兵衛を激長と
荒屋山を本陣
と定め大砲を
頂上へ
引上げ
様中へ射撃の
せーしが号ひ
あ色り清りられば
深丸い中途ヶ義城中へ
屋ーるがとそを明ヶ五日ハ

芝能と称せば株を抜んと
多能男ふ及びるゐ多べ
二月廿五日 朝霧いまだ晴
やらぬ年若七時とおもへ
ばより奥様を
敷と乳間ふ
新あらし熊ふ城能
ふ麦麦うり株
中の画くいまだ
あれぬ抱ふ多うる
と檜の狸男と
閑きそいるふ吸ふ

神風連の残黨
城責の先導

新京暴徒ら不騒動
さきとく暴挙ふ及
び〜須国名代の神風
連中さま麻児酒暴徒ら
ふんを通ト今日の株責先
輩と勤〜ゆをおも麦ら此古風
の装扮擬ふぶとをつみるもあれ
い小奥足にあが〜亜麦
都東の扮ふおどし孫
薙刀をたゞさへつ猛〜
気ふ押麦せうり谷ふ及るとれを
ゆをとそれおもちぶ人と今をとかせば

▲畏手りぬと狸男
ふう能戦跳をつぶ
をつけ行ひらち
出せば先ふ進ぶ



桜風士族と二三十人打
倒せば沢山ある似ず狼狽
し敵を迎へ戦ふ
八代つて来る暴徒
大小砲を激射する
古云と悉く逃引出さん
と行れども古云いさらふ
勢せば防禦の術をなし
ひれば暴徒らも奏あぐ
安乙宿へ退き
奏ひる心斎ふ陣せ暴徒らはや三四の
あひ戦ひ廿五日いよ和より綿田村を

押出せば小会の古云出迎へ砲戦開始
暴徒の勢と二分あひ分け古の力あ
り小会云の側面と古云ふ激撃
人少なる小会勢とれを防き止めず
臣ふ引き戦ひ佐賀人士
死臣大砲小砲合二丈敵の大等
陣す十余人対死をう
統督有栖川の云に
銃器入隊あり
と云へ一同ふ退
利臣ふ又宮城へ乱入せ
暴徒陣い奉還川の間
銃器小会

高瀬の狭間川
とへ戦ふ

あ[illegible]の[illegible]と激〳〵戰ひ〳〵官軍ふ村をふれ
暴徒い宮藏川と戰〳〵伊人ふ村と退きたられば
官軍い赤根村へ[illegible]を
きたるあ七浦をこう
俵丈六日伊倉
村へ退き
こる

▲廉兒陸軍少將

きたれば徒
るの川を
へぐそ
つて

▲大びふ奮
戰きこるゞ
官軍い[illegible]川
のよの流をひそこに
つたる暴徒
の

野津陸軍少將

▲浦ろを動きこう
たれば
賊ふの
おく[illegible]若[illegible]
安乘る村ち田村の民家へ火とうけ
[illegible]ふ[illegible]の[illegible]町へと退ぞ[illegible]が[illegible]七日みて
[illegible]川を中とる未明より戰ひ〳〵に午前官軍

少しく放し十二月に異船後放し
年後三月に後放さるに決せ
ざれば皮軍
ちきりふ大砲
と敵せば異船い
ひとりに皮軍
の脇後ろ
山の上より拳
ちりふ狙撃ふべふぞ
皮去大ひふ若戦色ろ
○徳て総督の文徳
め弥次三好の表若も

篠原國幹

▲酷らへし
前後左皮へ
六人まるぐ
斬ておろし
雑ろく籠と
徐く
取返し
と
久せ
しぶ
勇
その
猛よ

両巨魁の戦死い
第七編よ記す

怒陸あり赤赤大坂ひふ色ろ
徐結毒より 縁也む去士い
幾大隙とるかぞへられば
ふろてそまくるぞろ
あり陸軍わ弥次
去い
ろ漕ふろ河内
通りと逆撃ふ
異船と破りろ搭まで
押つあろしがふ伏船来猛まろて孫隙籠と
奪まれるとと弥次去いろ
一下敵加へつ敬中へ乱入て遮る異船と帰よ

村田三次

我陣中に席りしに突然国賊し紀州のどもなりの
心義を暗年山口様下に暴動せし城流様梁前原一緒
末の弁前原一格と云る者加何して逃亡る薩児湾に
身を
隠し世変面々
降盛がを
ちこびて
川氣の本陣
にありとるが
変を奮猛をあらしなり

一誠前原一格

鹿兒島戦爭記六編終

明治十年三月廿三日出版

一冊人　笹原田大次郎

（同大阪書小二番

出版人　杉浦朝治郎

010190510315

大友朔次郎